

## 注意事項

1. 試験問題の数は60問で解答時間は正味2時間30分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。
  - (1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを(例1)では一つ、(例2)では二つ選び答案用紙に記入すること。

(例1) 101 県庁所在地

はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

(例2) 102 県庁所在地はどれか。

2つ選べ。

- a 宇都宮市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

(例1)の正解は「c」であるから答案用紙の

101  a  b  c  d  e のうち  c をマークして101  a  b   d  e とすればよい。

(例2)の正解は「a」と「c」であるから答案用紙の

102  a  b  c  d  e のうち  a と  c をマークして102   b   d  e とすればよい。

- (2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例……  (濃くマークすること。)悪い解答の例……   (解答したことにならない。)

- (3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。
- (4) ア. (例1)の質問には二つ以上解答した場合は誤りとする。  
イ. (例2)の質問には一つ又は三つ以上解答した場合は誤りとする。
- (5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 37歳の初妊婦。妊娠28週の定期妊婦健康診査で来院した。既往歴に特記すべきことはない。身長158cm、体重58.5kg。2週前より1.5kgの増加を認める。仰臥位で脈拍108/分、整。血圧156/92mmHg。下腿に指圧痕を認める。尿所見：蛋白1+、糖(-)。血液所見：赤血球380万、Hb10.8g/dl、Ht38%、白血球9,200、血小板31万。

最も考えられるのはどれか。

- a 正常妊娠
- b 純粹型妊娠中毒症
- c 混合型妊娠中毒症
- d 子癇
- e HELLP症候群

2 28歳の3回経産婦。自然経膈分娩で3,540gの男児を出産した。胎盤を牽引して娩出させた。直後から性器出血が持続し、その後下腹部痛を訴え始めた。意識は清明であるが表情は苦悶様。脈拍96/分、整。血圧132/88mmHg。触診で子宮底を触れず、陰鏡診で腔内に腫瘤様のものを認める。

考えられるのはどれか。

- a 子宮破裂
- b 子宮内反
- c 頸管裂傷
- d 会陰裂傷
- e 弛緩出血

3 生後24日の新生児。在胎27週、968gで出生。Apgarスコア6点(1分)、7点(5分)。出生後からチアノーゼとうめき声とがあり、陥没呼吸を認めた。呼吸数54回/分。ただちに気管内挿管し、人工換気を開始した。生後1日の血清IgM値は50mg/dl(基準0~20)。20日目で人工換気を中止し、酸素投与のみで経過をみた。抜管後、症状は4日間は落ちついていたが、次第に喘鳴が聴取されるようになった。生後24日の白血球12,000、CRP0.1mg/dl(基準0.3以下)。胸部エックス線写真(別冊No. 1)を別に示す。

生後24日の状態で考えられるのはどれか。

- a 新生児一過性多呼吸
- b 胎便吸引症候群
- c 呼吸窮迫症候群
- d Wilson-Mikity 症候群
- e ウイルス性肺炎

別冊  
No. 1 写真

4 22歳の女性。顔色不良を心配する家族に付き添われて来院した。3年前からダイエットを始めて体重が減少し始めた。食べてもすぐに吐けば体重が増えないことに気づき、たくさん食べては嘔吐するようになった。最近立ちくらみもある。身長155cm、体重32.5kg。血圧94/52mmHg。血液所見：赤血球323万、Hb11.2g/dl、Ht32%、白血球2,700。血清生化学所見：総蛋白6.3g/dl、AST28単位(基準40以下)、ALT16単位(基準35以下)、Na133mEq/l、K3.6mEq/l、Cl89mEq/l。TSH3.8μU/ml(基準0.2~4.0)、T<sub>3</sub>70ng/dl(基準80~220)、T<sub>4</sub>6μg/dl(基準5~12)。

最も適切な対応はどれか。

- a 中心静脈栄養による体重増加
- b 食行動改善による体重増加
- c 昇圧薬による低血圧改善
- d 制吐薬による嘔吐改善
- e ホルモン補充による甲状腺機能改善

5 5歳の男児。友達と遊ばないことに気付いた家族に伴われて受診した。出生時に問題はなかった。しかし言葉の発達は遅れ、現在ある程度言葉の理解はできるが、会話は成立しない。視線を合わせることをしない。特定のテレビ番組には熱中するが、その他の事にはいっさい興味を示さない。手をばたばたさせる、体をぐるぐる回すなどの行動を好む。

この患児でみられないのはどれか。

- a 知能障害
- b 言語発達障害
- c 協調運動障害
- d 対人的相互性の障害
- e 常同的・反復的行動

6 63歳の女性。幼少時から体幹や四肢に色素斑が多発していた。思春期ころから体幹と四肢とに軟らかい皮膚腫瘍が出現し、次第に数が増えてきた。体幹の写真(別冊No. 2)を別に示す。

この皮膚腫瘍はどれか。

- a 脂肪腫
- b リンパ管腫
- c 神経線維腫
- d 肥満細胞腫
- e 海綿状血管腫

別冊  
No. 2 写真

7 52歳の男性。2か月前から眼周囲、手背および頭部に白斑と白毛とが出現し、急速に拡大してきたため来院した。4か月前から眼がかすみ、両眼の視力低下を自覚していた。視力は右0.6(0.8×-1.50D)、左0.5(0.9×-1.00D)。眼圧は、右16mmHg、左18mmHg。両眼の前房に軽度の混濁を認める。顔面の写真(別冊No. 3A)と右の眼底写真(別冊No. 3B)とを別に示す。左の眼底も同様の所見である。

この疾患で障害されるのはどれか。

- a 触覚
- b 味覚
- c 聴覚
- d 嗅覚
- e 温痛覚

別冊  
No. 3 写真A、B

8 48歳の女性。右眼の急激な視野異常を訴えて来院した。視力は右1.5(矯正不能)、左1.5(矯正不能)。眼圧は右14mmHg、左12mmHg。右の眼底写真(別冊No. 4A)と蛍光眼底造影写真(別冊No. 4B)とを別に示す。左眼に異常所見はみられない。

最も考えられる右眼の視野異常(別冊No. 4C①~⑤)はどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

別冊  
No. 4 写真A、B、図C①~⑤

9 68歳の女性。3か月前に左眼の中心暗点を自覚し、増悪したため来院した。左眼の眼底写真(別冊No. 5A)と蛍光眼底造影写真(別冊No. 5B)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 中心性漿液性網脈絡膜症
- b 網膜動脈閉塞症
- c 加齢黄斑変性
- d 黄斑円孔
- e 網膜剝離

別冊  
No. 5 写真A、B

10 50歳の男性。1週前から嘔声が出現したため来院した。発声時の咽頭所見(別冊No. 6A)および吸気時と呼気時との喉頭ファイバースコープ所見(別冊No. 6B)を別に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 扁桃腫瘍
- b 喉頭腫瘍
- c 食道腫瘍
- d 縦隔腫瘍
- e 頸静脈孔腫瘍

別冊  
No. 6 写真A、B

11 24歳の男性。1か月前に左眼に野球のボールが当たり、複視が消失しないため来院した。眼球上転時の眼部の写真(別冊No. 7)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 眼窩出血
- b 視神経損傷
- c 吹き抜け骨折
- d 視神経管骨折
- e 上眼瞼挙筋断裂

別冊  
No. 7 写真

12 80歳の男性。3か月前から微熱が続き、時々膿性痰を喀出していた。25歳時に肺結核症のため左胸郭形成術を受けた。呼吸数24/分。脈拍96/分、整。血圧146/90 mmHg。胸部の打診で左背部に濁音を認める。胸部エックス線写真(別冊No. 8)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 膿胸
- b 乳び胸
- c 縦隔炎
- d 胸囲膿瘍
- e 胸膜中皮腫

別冊  
No. 8 写真

13 19歳の男性。2年前から肺炎を繰り返すため来院した。体温36.5℃。呼吸数18/分。脈拍80/分、整。血圧120/76 mmHg。胸部聴診で呼吸音に異常を認めない。胸部造影磁気共鳴血管撮影(造影MRA)左前斜位像(別冊No. 9)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 肺分画症
- b 肺動静脈瘻
- c 肺形成不全
- d 胸部大動脈瘤
- e 肺血栓塞栓症

別冊  
No. 9 写真

14 48歳の男性。徐々に進行する呼吸困難を主訴に来院した。胸部聴診では fine crackles (捻髪音) を聴取する。胸部エックス線写真では両側肺野にびまん性陰影を認める。気管支肺胞洗浄液の写真(別冊No. 10A)と胸部単純CT(別冊No. 10B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 肺胞微石症
- b 肺胞蛋白症
- c サルコイドーシス
- d 特発性間質性肺炎
- e びまん性汎細気管支炎

別 冊  
No. 10 写真A、B

15 35歳の女性。夜間の咳、喀痰および喘鳴を主訴に来院した。症状は2か月前から出現し、ほぼ毎日あり、時に呼吸困難を伴った。タバコの煙などを吸い込んだ後、急に症状が悪化することもある。胸部聴診では wheezes を聴取する。スパイロメトリ：% VC 98 %、FEV<sub>1.0</sub> % 65 %。喀痰検査では好酸球の増加を認める。

この患者の長期管理薬として適切なのはどれか。

- a 去痰薬
- b 鎮咳薬
- c 吸入抗コリン薬
- d マクロライド系抗菌薬
- e 吸入副腎皮質ステロイド薬

16 60歳の男性。嘔声を主訴に来院した。1か月前に嘔声に気づき、次第に増強してきた。喫煙歴は20本/日を40年間。来院時の喉頭所見(別冊No. 11A)と生検組織H-E染色標本(別冊No. 11B)とを別に示す。

適切な治療法はどれか。

- a 抗癌薬の注入療法
- b 免疫療法
- c 放射線療法；
- d 喉頭水平部分切除術
- e 喉頭全摘術

別 冊  
No. 11 写真A、B

17 68歳の女性。突然出現した呼吸困難を主訴に救急車で搬入された。1週前からヨーロッパへ旅行し、今朝帰国した。旅行中は特に変わったことはなかったが、飛行機から降りて入国手続きをしている時、急に前胸部痛と呼吸困難とが出現し動けなくなった。意識は清明。身長152cm、体重68kg。体温38℃、呼吸数32/分。脈拍120/分、整。血圧100/50mmHg。心音では肺動脈II音の亢進を認めるが、呼吸音に異常はない。腹部に異常所見なく、下肢に浮腫はない。神経学所見に異常を認めない。尿所見：蛋白(-)、糖1+。血液所見：赤血球512万、Hb16.6g/dl、Ht50%、白血球7,000、血小板40万。胸部エックス線写真に異常を認めない。

この患者の治療に用いるのはどれか。

- a 抗菌薬
- b ヘパリン
- c キサンチン系薬
- d 吸入β受容体刺激薬
- e 副腎皮質ステロイド薬

18 26歳の女性。会議中にめまいと動悸とを自覚して救急外来を受診した。意識は清明。呼吸数24/分。脈拍は微弱。血圧90/68 mmHg。心電図(別冊No. 12)を別に示す。

まず行うのはどれか。

- a Valsalva 手技
- b リドカイン静注
- c アトロピン静注
- d ニトログリセリン静注
- e 直流通電

別冊  
No. 12 図

19 6歳の男児。学校の健康診断で心電図異常を指摘され来院した。出生直後から心雑音を指摘されていたが、特に自覚症状もなく精密検査を受けたことがなかった。身長115 cm、体重20.5 kg。呼吸数26/分。脈拍112/分、整。チアノーゼは認めない。胸骨左縁第2肋間で振戦(thrill)を触れ、4/6度の駆出性収縮期雑音を聴取する。II音分裂間隔は広くIIpが減弱している。心電図(別冊No. 13A)と胸部エックス線写真(別冊No. 13B)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 心室中隔欠損症
- b 心内膜床欠損症
- c 大動脈弁狭窄症
- d 肺動脈弁狭窄症
- e 動脈管開存症

別冊  
No. 13 図A、写真B

20 15歳の女子。学校の健康診断で心電図異常を指摘され来院した。運動時に時々胸部絞扼感があった。脈拍76/分、整。血圧126/76 mmHg。心電図(別冊No. 14A)と冠動脈造影写真(別冊No. 14B)とを別に示す。

診断はどれか。

- a 川崎病
- b 心筋梗塞
- c 大動脈解離
- d Leriche 症候群
- e Bland-White-Garland 症候群

別冊  
No. 14 図A、写真B

21 64歳の男性。1か月前から、駅の階段昇降時に胸部圧迫感を自覚するようになり来院した。20年前から高脂血症と糖尿病との治療を受けている。身体所見に特記する異常を認めない。負荷タリウム心筋シンチグラム(別冊No. 15A)と冠動脈造影写真(別冊No. 15B)とを別に示す。

治療で適切でないのはどれか。

- a ジギタリス投与
- b 抗血小板薬投与
- c 亜硝酸薬投与
- d  $\beta$  受容体遮断薬投与
- e 冠動脈バイパス術

別冊  
No. 15 写真A、B

22 69歳の女性。今朝6時ころから呼吸困難と手足の冷感とが出現し来院した。3日前に強い前胸部痛が出現したが、2時間後に軽快したため放置していた。来院時、意識は清明。体温36.0℃。呼吸数28/分。脈拍120/分、整。血圧80/62 mmHg。皮膚は蒼白で冷たい。心尖部に収縮期雑音を聴取し、両肺に coarse crackles を認める。心電図上 V<sub>1</sub>~<sub>3</sub> で QS パターン、V<sub>1</sub>~<sub>5</sub> で陰性 T 波を認める。胸部エックス線写真(別冊No. 16)を別に示す。

この患者に投与する治療薬で正しいのはどれか。

- (1) 抗菌薬
- (2) 利尿薬
- (3) 強心薬
- (4) 気管支拡張薬
- (5) 副腎皮質ステロイド薬

a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

別冊  
No. 16 写真

23 62歳の男性。昨夜突然強い背部痛が出現し、近医で鎮痛薬を投与されたが改善しないため救急車で来院した。強い背部痛を訴え顔貌は苦悶様。体温36.9℃。呼吸数20/分。脈拍104/分、整。血圧160/90 mmHg。胸部の打聴診で異常所見を認めない。腹部は平坦で肝・脾を触知しない。下腿に浮腫を認めない。血液所見：赤血球416万、Hb12.0 g/dl、Ht35%、白血球9,600、血小板21万。血清生化学所見：総蛋白7.4 g/dl、アルブミン3.8 g/dl、クレアチニン0.9 mg/dl。CRP2.9 mg/dl(基準0.3以下)。心電図で左室肥大の所見を認める。胸部造影CT(別冊No. 17A、B)を別に示す。

この患者への対応で適切でないのはどれか。

- a 絶対安静
- b 鎮痛薬投与
- c 鎮静薬投与
- d 血栓溶解薬投与
- e β受容体遮断薬投与

別冊  
No. 17 写真A、B



24 75歳の男性。健康診査の上部消化管造影で異常を指摘され来院した。高血圧と慢性気管支炎とに対して外来治療中であった。上部消化管造影写真(別冊No. 18A)と食道内視鏡写真(別冊No. 18B)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 食道潰瘍
- b 食道良性腫瘍
- c 食道癌
- d 食道憩室
- e 食道アカラシア

別冊  
No. 18 写真A、B

25 生後26日の新生児。7日前から哺乳後に嘔吐があり、次第に噴水状となったので来院した。食欲は良好で、下痢はなく、排便は5日前からない。右上腹部にオリーブ大の弾性硬の腫瘤を触れる。皮膚は乾燥し、緊張は低下している。血清生化学所見：Na 134 mEq/l、K 3.1 mEq/l、Cl 87 mEq/l。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.56、PCO<sub>2</sub> 45 Torr、HCO<sub>3</sub><sup>-</sup> 33 mEq/l、BE+7.4 mEq/l。

この患児の輸液組成に含めないのはどれか。

- a ナトリウム
- b カリウム
- c クロール
- d 乳酸
- e ブドウ糖

26 58歳の女性。倦怠感を主訴に来院した。8年前に胃癌で胃全摘術を受け、2年前まで定期的な検査通院をしていたが、特に問題なく体重も回復したため通院を中止した。2か月前から易疲労感を覚え、最近労作後の動悸と倦怠感が強い。1か月前の子宮がん検診では異常がなかった。便通は1日1回、現在便の色調の変化もない。胸部に異常を認めず、腹部は平坦、軟。腫瘤を認めず、圧痛もない。血液所見：赤血球260万、Hb 9.2 g/dl、Ht 30%、白血球5,500、血小板15万。血清生化学所見：空腹時血糖 90 mg/dl、総蛋白 7.2 g/dl、アルブミン 4.6 g/dl、尿素窒素 12 mg/dl、クレアチニン 0.8 mg/dl、尿酸 2.6 mg/dl、総コレステロール 180 mg/dl、総ビリルビン 1.2 mg/dl、AST 45 単位(基準 40 以下)、ALT 28 単位(基準 35 以下)、LDH 620 単位(基準 176~353)、Ca 9.8 mg/dl、P 4.4 mg/dl、Fe 44 μg/dl。

この患者の治療として正しいのはどれか。

- a 粘膜保護薬の経口投与
- b ビタミンDの経口投与
- c 抗癌薬の経口投与
- d ビタミンB<sub>12</sub>の筋注
- e 濃厚赤血球輸血

27 50歳の女性。昨日軽度の左側腹部痛とともに突然の鮮紅色の血便をみたため来院した。意識は清明。体温 36.7℃。脈拍 72/分。血圧 130/80 mmHg。腹部は平坦で、左側腹部に軽度の圧痛を認める。血液所見：赤血球 395 万、Hb 13.0 g/dl、Ht 39%。緊急で行った下行結腸部の内視鏡写真(別冊No. 19)を別に示す。

最も適切な処置はどれか。

- a 絶食補液
- b 抗菌薬投与
- c 濃厚赤血球輸血
- d 副腎皮質ステロイド薬注腸
- e 内視鏡的止血術

別冊  
No. 19 写真

28 23歳の女性。肝機能異常の精査のために来院した。1年前の会社入社時の肝機能検査に異常はなかったが、7か月前悪心と全身倦怠感とが出現し、近医で肝機能異常を指摘された。その後肝機能異常が持続している。飲酒歴はない。8か月前にまゆを濃くするため刺青を行った。身長158 cm、体重56 kg。眼球結膜に黄疸は認めない。右肋骨弓下に軟らかい肝を2 cm 触知する。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球410万、Hb 13.5 g/dl、白血球4,200、血小板24万。血清生化学所見：アルブミン4.2 g/dl、IgG 1,250 mg/dl(基準960~1,960)、総ビリルビン0.8 mg/dl、AST 58 単位(基準40以下)、ALT 74 単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ230 単位(基準260以下)、 $\gamma$ -GTP 62 単位(基準8~50)。免疫学所見：HBs 抗原陰性、HCV 抗体陽性、HCV-RNA 陽性、抗核抗体40倍(基準20以下)。腹部超音波写真(別冊No. 20)を別に示す。

この患者への対応として適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 体重減量
- c 肝庇護薬投与
- d インターフェロン投与
- e 副腎皮質ステロイド薬投与

別冊  
No. 20 写真

29 68歳の男性。下肢のむくみと腹部膨満感を主訴に来院した。C型慢性肝炎で長期に加療中であった。8月初旬、下肢のむくみに気づき8月末から尿量の減少とともに腹部膨満感が出現した。腹部は軽度膨隆し、肝を心窩部に8 cm 触知する。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球365万、白血球3,700、血小板7万。血清生化学所見：総蛋白5.8 g/dl、アルブミン2.8 g/dl、尿素窒素27 mg/dl、アンモニア138  $\mu$ g/dl(基準18~48)、総ビリルビン1.9 mg/dl、AST 68 単位(基準40以下)、ALT 58 単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ326 単位(基準260以下)、 $\gamma$ -GTP 46 単位(基準8~50)、Na 137 mEq/l、K 3.3 mEq/l、Cl 102 mEq/l。免疫学所見：HBs 抗原陰性、HBs 抗体陽性、HCV 抗体陽性、抗核抗体陰性、 $\alpha$ -フェトプロテイン(AFP)18 ng/ml(基準20以下)。

適切な治療はどれか。

- a 高蛋白食
- b 減塩食
- c 水分補給
- d 塩化カリウム液急速静注
- e 副腎皮質ステロイド薬投与

30 79歳の女性。最近、上腹部の圧迫感を覚えるようになり来院した。3か月前に溝に転落し上腹部を強打した。喫煙と飲酒歴とはない。貧血と黄疸とは認めない。腹部は軟だが、右上腹部に軽度膨隆を認め、軽い圧痛がある。上部消化管内視鏡検査で異常はない。腹部造影CT(別冊No. 21)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 急性膵炎
- b 膵仮性嚢胞
- c 漿液性膵嚢胞腺腫
- d 粘液性膵嚢胞腺腫
- e 膵癌

別冊  
No. 21 写真

31 56歳の男性。突然の下腹部痛を主訴に来院した。3年前に結腸癌のため右半結腸切除術を受け外来で経過観察されていた。今朝突然に下腹部痛が出現し、2回嘔吐した。顔面は苦悶様で下腹部全体に圧痛を認める。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球320万、Hb 11.0 g/dL、Ht 31%、白血球16,000、血小板15万。腹部エックス線単純写真立位像(別冊No. 22A)と緊急開腹時の腹部写真(別冊No. 22B)とを別に示す。

この患者の病態はどれか。

- a 単純性イレウス
- b 絞扼性イレウス
- c 麻痺性イレウス
- d 痙攣性イレウス
- e 結腸吻合部狭窄

別冊  
No. 22 写真A、B

32 18歳の男子。自家用車でスピードの出し過ぎのため、カーブを曲がりきれずに塀に激突し、救急車で来院した。右上腹部に軽度の鈍痛を訴える。意識は清明。呼吸数24/分。脈拍112/分、整。血圧120/84 mmHg。右前胸部と上腹部とに擦過傷と皮下出血とを認める。血液所見：赤血球345万、Hb 10.5 g/dL、Ht 32%、白血球8,500、血小板26万。血清生化学所見：総蛋白7.2 g/dL、アルブミン4.0 g/dL、尿素窒素10 mg/dL、クレアチニン0.6 mg/dL、総ビリルビン0.8 mg/dL、AST 135単位(基準40以下)、ALT 222単位(基準35以下)、LDH 440単位(基準176~353)。胸部エックス線写真で右第9肋骨に骨折を認める。腹部造影CT(別冊No. 23)を別に示す。

この患者の治療方針として適切なものはどれか。

- a 輸液で注意深く観察する。
- b 直ちに濃厚赤血球輸血を行う。
- c 腹腔穿刺ドレナージを行う。
- d 開腹ドレナージを行う。
- e 肝右葉切除術を行う。

別冊  
No. 23 写真

33 32歳の女性。3日前から続く高熱と咽頭痛とを主訴に来院した。甲状腺機能亢進症のため、1か月前から抗甲状腺薬を服用している。体温38.9℃、脈拍120/分、整。血圧120/80 mmHg。咽頭と口蓋扁桃とに偽膜を認める。胸部打聴診で異常所見はない。腹部は平坦で肝・脾は触知しない。血液所見：赤血球450万、Hb 14.0 g/dl、Ht 42%、白血球1,200(桿状核好中球2%、分葉核好中球2%、単球9%、リンパ球87%)、血小板22万。血清生化学所見：AST 35単位(基準40以下)、ALT 30単位(基準35以下)、LDH 220単位(基準176~353)。

まず投与するのはどれか。2つ選べ。

- a 抗菌薬
- b 抗腫瘍薬
- c 甲状腺ホルモン
- d 副腎皮質ステロイド薬
- e 顆粒球コロニー刺激因子(G-CSF)

34 4歳の男児。1週間前から発熱と顔色不良とを認め入院した。皮膚は蒼白、軀幹部に点状出血を認める。眼球結膜は貧血様。心尖部に2/6度の収縮期雑音を聴取する。肝を右肋骨弓下に4 cm、脾を左肋骨弓下に2 cm 触知する。血液所見：Hb 8.2 g/dl、Ht 23%、白血球63,000、血小板4.2万。プロトロンビン時間(PT)11.4秒(基準対照11.3)、APTT 33.4秒(基準対照32.2)。血清生化学所見：AST 35単位(基準40以下)、ALT 30単位(基準35以下)、LDH 2,600単位(基準176~353)、Fe 120 μg/dl(基準80~160)、フェリチン50 ng/dl(基準20~120)。骨髓血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 24)を別に示す。骨髓にみられるリンパ球様細胞はペルオキシダーゼ反応陰性で、B細胞形質を示す。

この患児の初期治療はどれか。2つ選べ。

- a 骨髓移植
- b 大量の輸液
- c 頭蓋放射線照射
- d 赤血球濃厚液の投与
- e 抗腫瘍薬による化学療法

別 冊  
No. 24 写 真

35 21歳の女性。抜歯後の出血が5日間続いたため来院した。数年前に鼻出血の止血困難があった。皮膚に出血斑を認めない。その他の身体所見に特記すべき異常はない。赤血球405万、Hb 11.0 g/dl、Ht 34%、白血球5,700、血小板28万。出血時間10分以上(基準7分以下)、プロトロンビン時間(PT)11.2秒(基準対照11.3)、APTT 58.1秒(基準対照32.2)。

最も考えられるのはどれか。

- a 血友病 A
- b 血小板無力症
- c ビタミンK欠乏症
- d von Willebrand 病
- e Wiskott-Aldrich 症候群

36 28歳の女性。全身倦怠感を主訴に来院した。5年前から健康診断で尿蛋白と血尿とを指摘されていたが放置していた。血圧148/94 mmHg。尿所見：蛋白2+、糖(-)、潜血2+、沈渣に赤血球10~15/1視野、白血球2~4/1視野、顆粒円柱1~5/1視野。血清生化学所見：総蛋白6.4 g/dl、尿素窒素27 mg/dl、クレアチニン1.6 mg/dl。腎生検組織のPAS染色標本(別冊No. 25A)と蛍光抗体法免疫グロブリン染色標本(別冊No. 25B)とを別に示す。

治療効果の指標として有用なのはどれか。2つ選べ。

- a 血圧
- b 尿蛋白
- c 血清補体価
- d 血清IgA値
- e 抗好中球細胞質抗体(ANCA)

別冊  
No. 25 写真A、B

37 44歳の女性。ふらふらする感じと両下腿の浮腫とを訴えて来院した。2年前から慢性的な食欲不振と嘔気とが出現し、3か月で体重が5 kg減少した。複数の医療機関を受診し、貧血と自律神経障害とを指摘されていた。6か月前に、両下腿の温度や痛みに対する感覚が鈍いことと浮腫とに気付いたが、様子を見ていた。最近、浮腫がやや増強し、いつもふらふらする感じがある。意識は清明。身長162 cm、体重43 kg。脈拍80/分、整。血圧：臥位110/74 mmHg、坐位102/60 mmHg、立位76/40 mmHg。眼瞼結膜はやや蒼白だが、眼球結膜に黄染は認めない。胸部聴診所見に異常を認めない。肝臓を右肋骨弓下に2 cm触知する。両下腿に軽度の浮腫はあるが、皮膚病変は認めない。両下肢で温痛覚と触覚とに低下を認める。尿所見：蛋白3+、糖(-)、潜血(-)、尿蛋白4 g/日、沈渣に異常はない。血液所見：赤血球333万、Hb9.7 g/dl、Ht29%、白血球3,800。血清生化学所見：HbA<sub>1c</sub>4.9% (基準4.3~5.8)、総蛋白5.0 g/dl、アルブミン2.5 g/dl、尿素窒素8 mg/dl、クレアチニン0.6 mg/dl、Na142 mEq/l、K3.8 mEq/l、Cl107 mEq/l。免疫学所見：CRP陰性、CH50 35単位(基準30~40)。胸部エックス線写真でCTR45%、肺うっ血はなく、心電図で低電位を認める。

最も考えられるのはどれか。

- a Goodpasture症候群
- b 膜性増殖性腎炎
- c 巣状糸球体硬化症
- d 糖尿病性腎症
- e アミロイド腎症

38 72歳の男性。悪心と意識障害とのために家族に伴われて来院した。6か月前に肺扁平上皮癌と診断され、化学療法を受けた。終了後、外来で観察されていた。2日前から尿量が多くなり、食欲不振と口渇とが出現した。昨日から悪心を伴うようになり、いつも眠っているようになった。意識はやや混濁し、呼びかけに対して容易に反応するが、時と場所に対する失見当識が認められる。脈拍104/分、整。血圧100/64 mmHg。ばち指を認める。右下肺に coarse crackles を聴取する。心電図でQT時間の短縮を認める。

最も考えられる電解質異常はどれか。

- a 低ナトリウム血症
- b 低カリウム血症
- c 高クロール血症
- d 高カルシウム血症
- e 高リン血症

39 1歳5か月の男児。腹部腫瘤を主訴として来院した。発育と栄養状態とは正常である。左上腹部が膨隆し、径15 cmの弾性硬、表面平滑な腫瘤を触れる。尿所見は正常。血液所見：赤血球378万、Hb 11.0 g/dl、白血球7,200、血小板22万。血清生化学所見：AST 32単位(基準40以下)、ALT 20単位(基準35以下)、LDH 770単位(基準176~353)。 $\alpha$ -フェトプロテイン(AFP)正常。尿中VMA正常。腹部造影CT(別冊No. 26)を別に示す。

診断はどれか。

- a 肝芽腫
- b 奇形腫
- c 脾嚢胞
- d 神経芽腫
- e Wilms 腫瘍

別冊  
No. 26 写真

40 65歳の男性。排尿困難のため来院した。直腸診で前立腺は鶏卵大に腫大し、左葉は石様硬で表面不整である。

まず行うべき検査はどれか。

- (1) 前立腺特異抗原(PSA)
- (2) 静脈性腎盂造影
- (3) 骨シンチグラフィ
- (4) 尿道膀胱鏡検査
- (5) 経直腸超音波検査

a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

41 30歳の女性。多量の粘稠性帯下を主訴に来院した。子宮頸部は腫大していたが、子宮体部は正常大で、両側付属器は触知しない。頸部擦過細胞診のPapanicolaou染色標本(別冊No. 27A)とコルポスコピー写真(別冊No. 27B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 扁平上皮異形成
- b 微小浸潤扁平上皮癌
- c 扁平上皮癌
- d 上皮内腺癌
- e 腺癌

別冊  
No. 27 写真A、B

42 80歳の男性。半年前から便秘気味であったが、最近、排尿時に気泡がプツプツと出てくるのに気付いて受診した。下腹部に痛みはない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血1+、尿沈渣に赤血球3~5/1視野、白血球5~10/1視野、桿菌3+、食物残渣1+。血液所見と血清生化学所見とに異常はない。

正しい診断はどれか。

- a 急性膀胱炎
- b 膀胱異物
- c 前立腺結石
- d 結腸膀胱瘻
- e 痔瘻

43 推定年齢60歳の男性。路上で突然倒れるところを目撃され、救急車で搬入された。高度の意識障害があり、疼痛刺激に対して左手で払いのける動作をする。右上下肢を全く動かさず、発語はない。発症1時間後に頭部単純CTを撮影し、引き続き脳血管造影を施行した。左内頸動脈造影の側面像(別冊No. 28A)を別に示す。

この患者の頭部単純CTは別冊No. 28B①~⑤のどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

別冊  
No. 28 写真A、B①~⑤

44 60歳の男性。足に力が入らず歩きにくいことを主訴に来院した。6か月前から両下肢遠位部の筋力低下が出現し、徐々に進行してきた。家族歴に類症はない。両下肢の遠位部に筋力低下と筋萎縮とを認める。感覚障害はない。四肢で深部反射が亢進し、Babinski徴候は両側で陽性である。頭部と脊髄とのMRIに異常なく、神経伝導速度は正常である。

次に行う検査はどれか。

- a 筋生検
- b 神経生検
- c 誘発電位検査
- d 針筋電図検査
- e 誘発筋電図検査

45 7か月の男児。前屈発作を主訴に来院した。3週間前から上半身を一瞬前屈し、同時に腕と大腿とを曲げる発作が出現した。発作は数秒の間隔をおいて何回も反復する。在胎39週。出生体重2,800g。Apgarスコア8点(1分)。頸定4か月。独坐とつかまり立ちとはまだできない。発声はほとんどない。体重7,500g。顔つきは無表情である。尿検査、血液検査および血清生化学検査に異常を認めない。脳波(別冊No. 29)を別に示す。

この患児の治療はどれか。2つ選べ。

- a ACTH療法
- b ケトン食療法
- c 免疫抑制療法
- d 血漿交換療法
- e 抗てんかん薬の投与

別冊  
No. 29 図

46 73歳の女性。右膝関節痛のため来院した。3か月前に突然、膝関節内側に痛みが出現した。痛みの特徴は夜間に強く、動かすことで少し軽減する。軽度の関節水症と膝関節内側の強い圧痛とを認める。右膝エックス線単純写真(別冊No. 30)を別に示す。

最も考えられる疾患はどれか。

- a 関節リウマチ
- b 離断性骨軟骨炎
- c 変形性膝関節症
- d 特発性骨壊死症
- e 神経障害性関節症

別 冊  
No. 30 写 真

47 20歳の男性。ラグビーの試合中に頸部を過度に屈曲して四肢麻痺となり、救急車で搬入された。頸椎脱臼骨折に対して観血整復内固定術を行い、現在術後2週目である。肘関節の屈曲と手関節の背屈とは十分な筋力があるが、肘関節の伸展は筋収縮を触知するのみである。下肢では筋収縮を触知できない。

この患者に適切なりハビリテーション処方はどれか。2つ選べ。

- a 間欠的自己導尿
- b 肺理学療法
- c 移乗訓練
- d 体位変換
- e 立位訓練

48 58歳の男性。労作時の呼吸困難を訴えて来院した。40歳ころから高血圧と糖尿病との治療を受けていた。身長160cm、体重68kg。脈拍80/分、不整。血圧168/102mmHg。鼻は大きく下顎と頬骨とは発達し、手足も大きく厚ぼったい。血中成長ホルモン濃度は高値を示し、ブドウ糖負荷で抑制されず、TRH試験に反応した。心電図では心室性期外収縮を認める。頭部エックス線単純写真でトルコ鞍は拡大している。

この患者に有効と考えられる治療薬はどれか。

- (1) ソマトスタチン誘導体
- (2) ドパミン作動薬
- (3) セロトニン再取り込み阻害薬
- (4) 交感神経 $\alpha$ 受容体遮断薬
- (5) ドパミン受容体拮抗薬

a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

49 40歳の女性。肥満と高血圧との精査を目的に来院した。6年前から徐々に体重が増加し、3年前から高血圧のため近医で降圧薬の処方を受けている。1か月前から時々胸痛も出現するようになった。身長153cm、体重63kg。脈拍80/分、整。血圧186/100mmHg。尿所見：蛋白(-)、糖1+。血液所見：赤血球490万、Hb15.1g/dl、白血球9,800。血清生化学所見：総コレステロール287mg/dl、Na143mEq/l、K3.4mEq/l。血中コルチゾール基礎値24 $\mu$ g/dl(基準5.2~12.6)、尿17-OHCS排泄量15.6mg/日(基準3~8)、17-KS排泄量1.7mg/日(基準3~11)。尿17-OHCS排泄量はデキサメサゾン8mg/日、2日間の投与で抑制されない。

診断はどれか。

- a Cushing病
- b 副腎腺腫
- c 副腎癌
- d 異所性ACTH産生腫瘍
- e 単純性肥満



50 52歳の男性。意識消失発作を主訴に家族に伴われて来院した。1年前から空腹時に冷汗、動悸および脱力感がみられ、食事をすると軽快していた。健康診断のため、昨夜から絶食したところ、今朝、意識がもうろうとなっているところを家族に発見された。身長170 cm、体重68 kg。来院時検査所見：血糖38 mg/dl、インスリン(IRI)26  $\mu$ U/ml(基準5~15)、抗インスリン抗体陰性。

最も考えられるのはどれか。

- a Addison病
- b 下垂体前葉機能低下症
- c インスリンノーマ
- d グルカゴン欠乏症
- e インスリン自己免疫症候群

51 62歳の男性。下肢の浮腫と視力低下とを主訴に来院した。50歳ころ、口渇、多飲および体重減少が認められたが放置していた。身長170 cm、体重72 kg。血圧174/92 mmHg。眼底に多数の点状出血、しみ状出血および軟性白斑があり、白内障も認める。両下肢に浮腫があり、アキレス腱反射は消失している。尿所見：蛋白3+、糖1+。血清生化学所見：空腹時血糖172 mg/dl、総蛋白5.8 g/dl、アルブミン2.8 g/dl、尿素窒素34 mg/dl、クレアチニン1.4 mg/dl、Na 140 mEq/l、K 4.2 mEq/l、Cl 102 mEq/l。

この患者の治療で適切なのはどれか。

- (1) 浮腫の改善にフロセミドが有効である。
- (2) 蛋白尿の軽減に副腎皮質ステロイド薬が有効である。
- (3) 降圧にアンジオテンシン変換酵素阻害薬は禁忌である。
- (4) 血糖コントロールにインスリン注射を直ちに行う。
- (5) 網膜症にレーザー光凝固の適応がある。

- a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

52 6歳の男児。かゆみを伴う皮疹のため来院した。皮疹は数か月前から頸部と四肢屈曲部とに繰り返し出現している。母親にアレルギー性鼻炎がある。体温36.5℃。血圧102/60 mmHg。胸部は打聴診で異常を認めない。頸部と両側の肘屈側とに落屑を伴う皮疹を認める。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球420万、Hb 14.3 g/dl、白血球7,300、血小板18万。血清生化学所見：総蛋白7.6 g/dl、AST 28 単位(基準40以下)、ALT 30 単位(基準35以下)。

この疾患でみられる検査所見はどれか。2つ選べ。

- a 好酸球増加
- b リンパ球減少
- c IgE高値
- d 血清補体価低値
- e リウマトイド因子陽性

53 61歳の女性。全身倦怠感、筋肉痛および四肢のしびれを主訴に来院した。2年前から喘息様症状が出発している。1か月前から両肩の疼痛と右足のびりびりした異常知覚とが出現し、対側の下肢と両前腕とに及んだ。体温36.8℃。血圧140/80 mmHg。リンパ節腫脹を認めない。胸部聴診上異常所見はない。下腿に紫斑を認める。左前腕の屈筋と左腓腹筋とに軽度の筋力低下を認める。両側前腕と下腿とに感覚低下を認める。尿所見：蛋白1+、糖(-)。血液所見：赤血球380万、Hb 13.3 g/dl、白血球22,300(好中球37%、好酸球42%、単球4%、リンパ球17%)、血小板48万。血清生化学所見：総蛋白7.3 g/dl、 $\gamma$ -グロブリン22.4%、AST 28 単位(基準40以下)、ALT 30 単位(基準35以下)、CK 42 単位(基準10~40)。CRP 4.4 mg/dl(基準0.3以下)。

この疾患でよくみられる自己抗体はどれか。

- a 抗核抗体
- b 抗DNA抗体
- c 抗Jo-1抗体
- d 抗ミトコンドリア抗体
- e 抗好中球細胞質抗体(ANCA)

54 9か月の男児。発熱、咳および喀痰を主訴に来院した。3か月前から中耳炎と副鼻腔炎とを繰り返している。体温 38.6℃。呼吸数 30/分。脈拍 104/分、整。聴診上、右上中肺に coarse crackles を聴取する。尿所見：蛋白 1+、潜血(-)。血液所見：赤血球 410 万、Hb 13.5 g/dl、白血球 12,300。血清生化学所見：血糖 82 mg/dl、総蛋白 7.0 g/dl、Na 140 mEq/l、K 3.5 mEq/l、Cl 100 mEq/l。IgG 100 mg/dl (基準 240~620)、IgA 検出感度以下(基準 10~35)、IgM 検出感度以下(基準 40~95)。CRP 18.9 mg/dl (基準 0.3 以下)。

この疾患で正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 遺伝性である。
- b 胸腺腫を認める。
- c T細胞は減少する。
- d B細胞は減少する。
- e 肺炎球菌抗体価が高い。

55 35歳の男性。39℃を超える発熱、全身の筋肉痛および関節痛を訴えて来院した。カメラマンとして西サモア諸島に2週間滞在し、10日前に帰国した。撮影中よく蚊に刺されたと言う。意識は清明。体温 39.5℃、脈拍 92/分、整。血圧 110/76 mmHg。軟口蓋に小出血点が散在しているが、頬粘膜に紅暈を伴った白色斑は認めない。頸部リンパ節腫大はない。腹部では肝を右肋骨弓下に 1 cm 触知し、脾濁音界の拡大を認める。尿所見：蛋白 1+、糖(-)。血液所見：赤血球 450 万、Hb 14.5 g/dl、Ht 41%、白血球 2,800、血小板 8 万。血清生化学所見：血糖 102 mg/dl、総蛋白 7.2 g/dl、尿素窒素 28 mg/dl、クレアチニン 1.0 mg/dl、総ビリルビン 2.3 mg/dl、AST 156 単位(基準 40 以下)、ALT 223 単位(基準 35 以下)、Na 140 mEq/l、K 4.0 mEq/l、Cl 99 mEq/l。CRP 1.6 mg/dl (基準 0.3 以下)。発熱 3 日目に全身に発疹が出現した。その時の写真(別冊No. 31A、B)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 麻疹
- b 黄熱病
- c ラッサ熱
- d デング熱
- e 熱帯熱マラリア

別冊  
No. 31 写真A、B

56 27歳の女性。下腹部痛を主訴に来院した。2週前から多量の膿性帯下を認めていたが、7日前から下腹部痛をきたし、3日前から悪寒を伴う発熱がある。下腹部全体にBlumberg徴候を認め、内診でDouglas窩に抵抗と圧痛とを認める。白血球19,500、CRP10.4 mg/dl(基準0.3以下)。子宮頸管分泌物検査：クラミジア抗原陽性。

適切な治療はどれか。

- a 膣洗浄
- b 卵管通水
- c 抗菌薬投与
- d 抗ウイルス薬投与
- e 付属器摘出術

57 45歳の男性。上部消化管造影で異常を指摘され、精密検査のため来院した。胃内視鏡検査で十二指腸潰瘍であると診断され、ウレアーゼ試験が陽性であった。

この疾患の治療に組合せて用いる抗菌薬はどれか。

- (1) アミノグリコシド系
- (2) セフェム系
- (3) ニューキノロン系
- (4) ペニシリン系
- (5) マクロライド系

- a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

58 32歳の初妊婦。妊娠32週。破水感と下腹部痛とを主訴に来院した。家族歴に特記すべきことはない。既往歴にクラミジア頸管炎の治療がある。これまでの妊娠経過に異常の指摘はない。身長165 cm、体重65 kg。体温38.5℃。脈拍120/分、整。血圧130/70 mmHg。意識は清明。腹部に圧痛を認め、内診では子宮口1 cm開大、展退度50%。卵膜を触知せず羊水漏出を認める。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球380万、Hb11.5 g/dl、Ht34%、白血球21,000、血小板25万。CRP5.0 mg/dl(基準0.3以下)。胎児心拍数陣痛図で心拍数基線は180/分、心拍数基線細変動の減少を認める。5分周期の子宮収縮がある。

最も考えられるのはどれか。

- a 卵管炎
- b 子宮筋層炎
- c 絨毛膜羊膜炎
- d 腎盂腎炎
- e 骨盤腹膜炎

59 58歳の男性。急性骨髄性白血病の地固め化学療法中の好中球減少期に38℃台の発熱が出現した。このときの胸部エックス線写真に異常はなかった。血液培養を施行後に広域スペクトル抗菌薬を投与した。5日後にも解熱せず、咳嗽が出現した。血液培養の結果は陰性であった。血液所見：赤血球380万、Hb12.1g/dl、Ht35%、白血球3,400(桿状核好中球10%、分葉核好中球52%、好酸球4%、好塩基球1%、単球4%、リンパ球29%)、血小板16万。CRP8.7mg/dl(基準0.3以下)。β-Dグルカン28.1pg/ml(基準20以下)。胸部エックス線写真(別冊No. 32)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 肺結核
- b 肺アスペルギルス症
- c クラミジア肺炎
- d マイコプラズマ肺炎
- e ニューモシスチス・カリニ肺炎

別 冊  
No. 32 写 真

60 45歳の男性。定期健康診断で異常といわれたので職場の健康管理室に来室した。喫煙歴は20歳から1日30本。飲酒歴は日本酒を1日3合。運動習慣はない。前月の時間外労働時間は86時間であった。身長164cm、体重80kg。血圧158/92mmHg。血清生化学所見：空腹時血糖144mg/dl、総コレステロール240mg/dl、トリグリセライド180mg/dl(基準50~130)、AST22単位(基準40以下)、ALT40単位(基準35以下)、γ-GTP60単位(基準8~50)。

産業医の指導として誤っているのはどれか。

- a 禁煙を勧める。
- b 節酒を勧める。
- c 高強度のスポーツを行うよう勧める。
- d 時間外労働時間を短縮するよう指導する。
- e 精密検査を受けるよう勧める。

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)